〔ウイルス　第62巻　第2号，pp.259-260，2012〕

ウイルス学会関連研究集会紹介

3. 第9回ウイルス学キャンプ in 湯河原報告（7月10・11日）

大岡　静衣
東京都医学総合研究所ゲノム医科学研究分野
ウイルス感染プロジェクト

梅雨が明けた晴天のもと，恒例のウイルス学キャンプin湯河原が7月10日から1泊2日の日程で開催されました．このウイルス学キャンプでは，毎年，顕著な功績のあった若手研究者，シニアなウイルス学研究者，隣接する他領域の研究者による教育講演や，一般参加者の口頭発表，ポスター発表を行っています．今年も，次第に暑さが厳しくなってきていたにもかかわらず，「若者よ！学問に飢えろ！」という熱いメッセージに応え，若手研究者たちとシニア研究者ら28名が全国から湯河原に集いました．シニア研究者としては，ウイルス学会を牽引する著名な先生方という錚々たる顔ぶれで，比較的小規模なキャンプであるにも関わらず充実した講師陣でした．湯河原では，ひんやりとして清々しい空気に包まれ，和やかにキャンプが始まりました．

初回から9年間ずっとこのウイルス学キャンプを主催されている東京都医学総合研究所の小池智先生による開会挨拶に続き，京都大学ウイルス研究所の竹内理先生による教育講演「自然免疫における炎症の転写後調節メカニズム」を拝聴しました．ウイルス感染とは密接な関係がある自然免疫システムについて，最近の知見を交え，基礎から講義をしていただきました．自然免疫は，細菌，ウイルス，寄生虫といった感染病原体の初期の認識と，その後の炎症反応の惹起や獲得免疫の誘導に重要な役割をはたす生体防御機構ですので，ウイルス感染現象を理解するためには必ずフォローしておかなければならない，密接に関係している分野です．異分野ということもあり，なかなか最近の知見

まで良く理解するのは難しいのですが，竹内先生の大変わかりやすいお話を伺い，とても勉強になりました．

次に，筑波大学大学院人間総合科学研究科の永田恭介先生による教育講演「ウイルス研究が育んだ現代生命科学」を拝聴しました．歴史的に見てどんなにウイルス研究が生命科学の要となってきたか，そして，これからもウイルス研究は大変重要な学問分野であり続け，それを将来担っていくのが若手研究者なのだという，永田先生から若者への期待を込めた強いメッセージが伝えられました．私はウイルス研究が現代生命科学の基礎に貢献したことは知っていましたが，実際にそうしたウイルス研究に対して数々のノーベル賞が順当に与えられていることを知りました．そして，ウイルス研究は生命科学の中で，思っていたよりもはるかに重要な位置づけにあるということや，その重みがきちんとノーベル賞選考委員会には認識されているのだ，ということを改めて感じ，ウイルス研究に誇りを感じました．昨今，派手な結果を早急に求められることから，地味な研究は衰退しつつあるのではないかと危惧しています．さらに，一般受けする応用科学の方向にとかく偏りがちで，ともすると評価自体が応用科学偏重ではないかと思うこともあります．そんな厳しい情勢ではありますが，ウイルス研究から生命科学へ，そして，生命科学からウイルス研究へと，相互に補完し合いながら，これからもウイルス側か

連絡先
〒156-8506
東京都世田谷区上北沢2-1-6
公益財団法人東京都医学総合研究所ゲノム医科学研究分野ウイルス感染プロジェクト
TEL & FAX: 03-5316-3224
E-mail: ohka-si@igakuken.or.jp

らの視点を活かして，生命科学の基礎を堅固なものにしていかなければならないと緊張感を持った次第です．

教育講演の後，若手研究者4人がそれぞれの研究内容の発表を行い，それに関して熱い議論が繰り広げられました．発表の最後には，参加者全員が質問する機会を持てるようにとの配慮から，できる限りの時間が若手に割り当てられ，様々な疑問が気軽に発表者にぶつけられていました．

夕食の後も，日をまたいでの集中討論が繰り広げられました．集中討論用に割り当てられた部屋の座敷に全員が集結しました．キャンプ会場となったニューウェルシティ湯河原ホテルでは，参加者全員がワンフロアーに宿泊し，フロアー貸し切り状態だったのも，気兼ねせずに集中討論できる一つの要因だったと思います．座敷でくつろぎながら，自然と気持ちもほぐれ，ざっくばらんな雰囲気で親交を深めることができました．

翌日はポスターセッション発表者21名それぞれが1分間ずつスピーチし，研究内容の簡単な紹介をした後，ポスター前に立っての質疑応答が行われました．すばらしい講師陣とのディスカッションは，大変興味深く，勉強になるものだったと思います．最後に，小池先生からの閉会の辞で今年のウイルス学キャンプは幕を閉じました．

来年は記念すべき第10回となります．小池先生曰く，発足当初は，こんなに長く続くとは思っていなかったそうですが，ウイルス研究を担う次世代を鍛えなければというシニア研究者の熱い思いに若手研究者が応える形でここまで続いてきました．これからは，ウイルス学キャンプで育った若手が，数年後に今度は講師側として参加して，シニアから若手へとウイルス学のエッセンスをどんどん引き継いで行くことで，将来ウイルス学が今よりもっと魅力的な分野になっていくのではないかと思います．

ウイルス学キャンプin湯河原については，ウイルス学会のHPからリンクしているURL（http://jsv.umin.jp/camp/camp.html）をご覧いただきますと，これまでの軌跡や今年度の様子がわかります．私は，数年前にこのキャンプに一度出席したことがあるにも関わらず，「若者よ！学問に飢えろ！」という強烈なメッセージなどに圧倒され，今回の参加前は，どれだけスパルタキャンプなのだろうと若干尻込みしてしまいました．しかし，実際はスパルタではなく，シニア世代に真剣にご指導いただける，すばらしい機会だと再認識しました．ご興味をお持ちの方は，是非来年，人間味あふれるウイルス研究者達との熱い時間を共有しに，ご参加くださいませ．